令和六年蒼天句会
「今月の一句」集

栗原公子

待つといふ昂ぶりのあり蛍狩
山したたる点字表記の方位盤
折り鶴を開かば四角ひろしま忌
風さやか少女らの手話にぎやかに
鬼の子にやさしき風の子守歌
風止みてより極月の星の数

田野辺隆男

「今」「ここ」を楽しみてをり鰯雲
爽涼の粋集めしやこの滴
遺影をば窓辺に置きぬ小春風
遠山に白き波あり枯薄

新井婦紗子

世知辛い時をゆるめて蛍とぶ
おはようと咲く朝顔や今日も晴れ
女子会のこぼれ話にアイス盛る
秋爽や指の先まで深呼吸
新米の粒立ちあがる塩むすび
山茶花や日々の命の咲いて散る

上野賢一

手のひらにふわりと蛍寺の径
熱戦に負けないエール夏の雲
聞き取れぬ防災無線いわし雲
秋晴れや紅白帽子位置につき
再起はかりて小春日の富士仰ぐ
年惜しむ彼方の星に俊太郎

江戸繁一

蛍火に人静まれり橋の上
朝顔や体操の子等見守りて
網を干す浜にひろがる鰯雲
爽籟や老舗旅館の掛け時計
継がれきし去来の庵の小春かな
枯すすき風と交える古戦場

大西孝志

六月の風はブルーや紫雲木
熔鉱炉の煙真つすぐ朝曇
新涼や第一句集ならぶ書架
上総路の低き山並月さやか
湾奥は第二の故郷秋つばめ
炎立つごとし夕日の枯すすき

川上ムツミ

目つぶれば遠き昔の蛍狩
朝顔の青に目覚める朝清し
天をつく入道雲や我はたち
小さき家小さき幸せ爽やかに
明けの海金波銀波の小春かな
枯れ薄夢を観た日も我にあり

近藤信江

雨上がり沓脱石の蛍かな
お神楽の笛艶増して夜の秋
ご先祖とつもる話や彼岸花
秋気澄む袱紗さばきの指の先
ビル解体ネットを揺らす虎落笛
白菜干す塩梅という言葉好き

佐々木静江

梔子の花に聞かせて独り言
朝顔や朝の陰りに息づいて
バスを待つベンチに一人鰯雲
爽やかやグラス拭き上ぐ昼下り
秋光の尖塔数ふ古都の路
金管に冬日をのせてジャズライブ

柴　鎮夫

塞ぐ手の隙間を覗く蛍かな
飛び飛びの片蔭選つて通院日
白露過ぎやっと驚く風の音
爽やかや合掌解く法隆寺
ＣＡの微香爽やか夜間飛行
地震跡に戻る白鳥能登の空

菅　隆彦

蓮池に白鷺一羽降り立ちぬ
朝顔市買い手をそそる多彩かな
月白の横浜埠頭街光る
曼殊沙華見頃近づく仏界
紅葉山はるかに里の水車音
銀杏落葉の葉音きわやか並木道

外園重子

吹つきれて籠の蛍を野に放つ
朝顔や藍を連ねて庇まで
二拍子で鳴らす鋏や松手入れ
初ひ母の胸はふくよか豊の秋
おでん鍋また煮返して独りなる
深川に閻魔大王座し小春

三浦紹子

松蝉やパラグライダー大空に
蒼天に雲二三片蝉しぐれ
京の町甍の波と鰯雲
三本の案山子が守る古代米
小春日や猫は伸びして欠伸して
小春日や背中温める野の昼餉

和田久恵

畦道の草や蛍の宿なるか
大輪の紺の朝顔咲く隣家
ウオーキング今日は止めたり暑気払ひ
朗朗と響く独唱秋うらら
小春日や少人数の七回忌
留守多き隣家の庭の石蕗の花

撮影:2024.11.7

編集日　2024.12.15